

論題 中世における聖書解釈

—『創世記』をめぐる—

司会 泉 治典／稲垣良典

提題：被造性の意味をめぐる— 4世紀東西
教父の『創世記』解釈点描

上智大学 荻野弘之

提題：アウグスティヌスにおける〈読〉(legere)
と〈解〉(intelligere)

西南学院大学 森 泰男

提題：「創造の概念」と「創造の記述」：13世紀に
おける『創世記』第1章の役割

ボン大学名誉教授 V. クルクセン

(於 早稲田大学 1996. 11. 10)

泉 治典

司会

神秘主義についてのシンポジウムは多くの成果を得て終わり、本年と次年は聖書解釈を主題とするシンポジウムを行うこととなった。今回ギリシア教父からでなくラテン教父から始めたのは、もっぱら準備の都合による。提題者についてご紹介すると、荻野弘之氏は最近教父の「ヘクサメロン文学」を取り上げて西方教会の救済史的解釈との相違を論じ、聖書解釈の多様な論点を示された気鋭の徒である。森泰男氏は早くからアウグスティヌスの創世記註解を扱い、本学会でも発表されているが、今回は多くの解釈法のうち特に「霊的」と呼ばれる部分に立ち入っておられる。W. Kluxen氏はこのたび C. Steel 氏らと共に早稲田大学主催国際コロキウムに参加されたのであるが、このシンポジウムに提題をお願いした所、ご快諾いただいて感謝にたえない。提題はトマス、グロステスト、エックハルトに関わっており、前述のヘクサメロン文学の行く方を示したことは期せざる一致であった。

討議はいつものように時間不足であったが、要点を三つあげる。(1)聖書解釈といっても創世記、詩編、ヨハネ福音書、パウロ書簡等で異なる問題が開示される。創世記の場合、宇宙・人類・歴史の始まりが問われ、「始」と「源」をめぐる多様な論が展開される。ヘクサメロン文学は始源に終末をかさねるという特徴を持つ。アンブロシウスは創造と過越をかさねて新しい生の始めを語ったという。(2)比喩的象徴的解釈のほうが字義的解釈よりも高次とされる場合でも、後者を軽視せず、'ad litteram'を尊ぶことが聖書解釈史上歴然としている。また比喩といっても'facta-dicta'の非分離を前提する予型論が多用されたことは注意を要する。「知らんがために信ず」の立場に立てば、出来事の言語化の探究は聖書の霊的解釈の遂行なのである。(3)創造だけでなく創造記事をも概念化する試みがトマス以後活発である。創造における神の働きの無媒介性は principium と verbum の同一視でもって説明できず、創造の光を物体性一般の形相と見るとか、神の内なる創造を語るということが起こった。この形而上学的要求が近代の批判的解釈とどう結びつくかは一考に値するであろう。

聖書と神学的言語

稲垣 良典

エックハルトは『創世記注解』の冒頭でトマス・アクィナスとモーゼス・マイモニデスの他に、アウグスティヌス、アンブロシウス、パシレイオスをアウクトリタスとして挙げており、今回のシンポジウムで行われたように、エックハルトとはほとんど千年の歳月によってへだてられたこれら後者の三人の著作家による『創世記』釈義をエックハルト自身の仕事と比較し、検討することは、示唆に富む、興味深い試みであるといえる。しかし、聖書釈義の問題、およびその歴史についてほとんど無知な私にはクリュクセン、荻野、森三教授による提題を簡潔に整理した上で問題点を指摘し、適切な論評を加えることはできない。そこで、シンポジウムの議論と何らか重なることを期待しつつ、個人的な研究関心に由来するコメントをのべることにしたい。

司会者の一人としてこれらの提題に耳を傾けている間に私の心に去来したのは、この三人の神学者たちが「字義的に」あるいは「霊的に」解釈することを試みた聖書の